

石原ケンジ、二年ぶり三度目のステップスギャラリー
個展である。一度目は紙に墨、二度目はキャンバス若
しくは板にアクリル、共に抽象的表現であった。今回
は動物達である。イラストレーターはどのような対象
でも描けることが前提であり、同じモチーフでも全く
異なるタッチで描くことが求められる。デザイナーで
イラストレーターである石原の本領が十二分に発揮
した展覧会であると定義することが出来る。

ヤモリ、フクロウ、金魚、オオカミ、犬、猫等、大小
様々な動物が、大型画面から小品にまで描かれる。今
回の作品は依頼があるわけではないから、イラスト的
というよりも、やはり現代美術作品であるとすべきで
あろう。イラストレーターの展覧会となると、陽気さ
が強調される。背後に広告の存在が見え隠れする。私
はそれを決して否定はしないが、剥き出しの現代美術
とは区別する。石原は異なるテイストを提示する。

依頼がない=拘束されていない動物達は、自由に描か
れているが、決して「気俣」ではない。それぞれに意
味と意義がある。その理由は石原しか知ることはない
だろうが、我々は生きるものの「存在理由」の切実さを知
る。それは同時に、制作する者の存在理由にも繋がる。原
理的な現代美術者からすれば、イラスト的など物足りない
かもしれない。しかし、百人百様の人間の姿を尊重し、そ
の上で自己と向き合うことが現代美術には不可欠である。
私は今回出品された、石原が描くオオカミから目を離すこ
とができない。単なる絵画やイラストでは、このようには
決してならない。リアリズム、デフォルメ、様々な技法の
何処にも当て嵌まらない。それでもこれが「オオカミ」で
あることが認識できる。それも普遍的なオオカミではなく、
立った一匹の、個性あるオオカミを描いているように見え
るのだ。正面を向くその眼差しは気品に溢れ、描かれてい
ない確固たる躯体を想像することが出来る。
横向きで吠えるオオカミの図も魅力的である。私はここで
図らずとも「図」と書いた様に、日本の明治期以前の古画
をこの作品は思い起こす。日本の古画は「四季山水図」な
ど呼称されるが、実はタイトルなどつけられることはなく、
明治期に研究者が西洋近代的手法で区分けするために必要
とされた。日本の古画は、名も無き存在だったのだ。こ
の点においても、石原の作品は共通するのではないか。

